

日韓の大学生はコロナ禍における大学生活を どのように捉えているか

高柳 有希*・安 龍洙**

(2022年1月28日 受理)

How are Japanese and Korean college students thinking about a college life in COVID-19?

Yuki TAKAYANAGI* and Yong SU AN**

(Received January 28, 2022)

抄録

本稿では、PAC分析を用いて、日本の大学に在学中の日本人学生2名と、韓国の大学に在学中の韓国人学生2名を対象に、日韓の大学生が「コロナ禍での大学生活」をどのように捉えているのか調査を行った。その結果、「人に会えないこと」に関する内容が被調査者4名に共通して挙げられ、マイナスのイメージで捉えられていた。オンライン授業に関しては、日本人学生2名は「たくさんの資料提供」「学生1人1人の顔が見える」などのプラスの内容について、韓国人学生2名は「集中できない」「質問しづらい」というマイナスの内容を中心に話をした。しかし、日韓の学生1名ずつが「課題」の存在の大切さに触れ、オンライン授業を運営するうえで「課題」を出すことは学生たちのモチベーション向上に効果があると分かった。また、オンライン授業によって「昼夜逆転」という生活習慣の乱れも見受けられた。また、コロナ禍になってから、人との連絡の頻度が増え、オンラインでつながるという方法が強制的に日常化され、離れたところにいる友達と繋がるきっかけが以前より増えているという結果が示された。

【キーワード】日本人学生、韓国人学生、大学生活、COVID-19、PAC分析

1. はじめに

本研究は、日本社会における日本人と外国人の異文化相互理解について、外国人がどのように理解し評価しているのかを、個人別態度構造分析法 (Analysis of Personal Attitude Construct: PAC分析)

* 仁済大学リベラルアーツカレッジ国際語文学部

** 茨城大学全学教育機構

を用いて、認知的・情意的観点から探る一連の研究の一部である。

本稿では日本の大学に在学中で日本に在住の日本人学生2名、韓国の大学に在学中で韓国に在住の韓国学生2名を対象にPAC分析を用いて、日韓の大学生が「コロナ禍での大学生活」をどのように捉えているのか調査し、その特徴を探った。

調査は、被調査者がコロナ禍の大学生活を約1年間終えた2021年1月末に行った。

これまでに新型コロナウイルス (COVID-19) (以下 COVID-19) が日本人学生に及ぼす影響について探った先行研究としては高柳・安 (2021)、飯田ら (2021) が挙げられる。また、COVID-19 が韓国学生に及ぼす影響について探った先行研究としては강진호ら (2020) が挙げられる。本研究では、COVID-19 流行下における日本人学生との韓国学生の生活について考察し、先行研究と比較しながら彼らのコロナ禍での大学生活の特徴について分析したい。

高柳・安 (2021) では、韓国留学中の日本人学生2名を対象に COVID-19 が韓国での留学生活に及ぼす影響について調査を行った。その結果、被調査者2名に「韓国語を学ぶ環境の悪化」と「大学の対応への不安」といった内容が共通してネガティブなイメージで挙げられた。相違点としては、COVID-19 流行中、韓国で過ごしていた被調査者 A は不便だが貴重な体験ができたとポジティブに捉え、休学して日本で過ごしていた被調査者 B は自身の将来や韓国語能力の低下に対してネガティブに捉えていたことが挙げられた。このことから、COVID-19 流行という環境下でも韓国に身を置くことで、「日本では得難い経験や学びができるということ」オンライン授業については、対面授業に比べて集中力の低下など不便な点が挙げられたが、「少人数であればオンラインライブ授業を行うことで効率的な学習ができる」ということが示された。

飯田ら (2021) では、北海道内の909名の大学生を対象に「新型コロナウイルス発生前後の経済的困り感」「オンデマンド型授業及びライブ型授業の負担感」「精神的健康度」「孤独感」について調査を行った。その結果、新型コロナウイルス発生によって経済的に困っていると認知している学生が増加しており、親の雇用状況や本人のアルバイトなどの収入が不安定であることが推察されるとした。また、オンライン授業の負担感については二極化が認められ、学生個人のオンライン環境や知識によって負担感の受け止め方が異なると指摘した。また、大学生の精神的健康が低下しているが、孤独感はさほど高くないという結果がでた。

강진호ら (2020) では、5名の韓国学生に「COVID-19によるソーシャルディスタンスを通して、変化したライフスタイル」について調査を行った。その結果、心理的な変化として「(マスク購入や感染・死亡に対する)不安と恐怖を感じる」「外出自粛によりブルーな気持ちになる」「完治者のニュースに安堵する」ということが挙げられ、環境的な変化としては「ソーシャルディスタンスによる外出自粛」「COVID-19による学業運営の変化 (オンライン授業及び課題での運営で学業の質が低下)」が挙げられ、行動的な変化としては「マスク購入の行列 (複数薬局訪問、インターネットで高額購入)」「個人の衛生管理の徹底 (マスク着用、アルコール消毒、換気、手洗い)」が挙げられた。

本研究では、「コロナ禍での大学生活」をどのように捉えているかについて、日本の大学に在学中の日本人学生と韓国の大学に在学中の韓国学生を対象に調査をすることで、日韓の学生の各特徴、また共通点、相違点を検証した。

2. 調査方法

調査は、1部と2部に分けられる。1部は質問紙による調査で、調査協力者の属性を尋ねるフェイスシートと「コロナ禍での大学生活」に対するイメージ評価からなっている。1部のイメージ評価の手順は以下の通りである。

- (1) あなたは「コロナ禍での大学生活」という表現からどんなイメージが思い浮かびますか？思い浮かんだイメージを「単語、または短い文」で下の【質問I・記入例】のように【質問I】に記入してください。上記①～③はイメージ項目に入れて、あなた自身のイメージを7個以上書き、全体のイメージ項目が10個以上になるようにしてください。
- (2) (1) で書いたそれぞれの「単語か短い文」が、プラス・マイナスのイメージに関係なく、あなたが「コロナ禍での大学生活」を考える時に、重要と考える順番に並べ替えてください。
- (3) 次に、「重要イメージ」のイメージ項目同士を比較して、二つの組み合わせがどの程度近いのか、判断していただきます。最初に、①と②を比較します。①と②の関係が、直感的なイメージやその内容から見て、どの程度近いのか、次の尺度で判断して、「1、2、3、・・・」と書いてください。同じ要領で、①と③、①と④・・・というふうに、最後の組み合わせまで比較して、記号1、2、3などで書いてください。尺度は、非常に近い=1/かなり近い=2/いくぶん近い=3/どちらともいえない=4/いくぶん遠い=5/かなり遠い=6/非常に遠い=7とします。

上記(3)において作成された「重要イメージ対比表」を基に、ウォード法でクラスター分析をし、デンドログラムを作成した上で、2部のインタビューによる調査を行った。2部の調査では個々の調査協力者のデンドログラムに基づき、インタビューによる調査を行った。まず、調査協力者にクラスター分析を行ったデンドログラムを見せ、各項目についての説明やクラスター分けについての解釈について尋ねた。最後に、連想項目のイメージについて、プラスイメージの場合は(+)、マイナスイメージの場合は(-)、どちらともいえない場合は(0)の記号を記入してもらい、各イメージを抱くようになったきっかけや媒体などを尋ねた。

なお、調査についての説明及び協力の同意はカカオトーク及びLINE(SNSアプリケーション)を通して確認した。調査は被調査者がコロナ禍の大学生活を約1年終えた2021年1月末にカカオトーク及びLINE(SNSアプリケーション)の音声通話を利用して行われた。また、韓国人被調査者は2名とも日本語能力試験N1取得者であり、日本語学習歴約6年、日本への1年の留学経験がある日本語上級者であるため、日本語での調査に言語的な不自由はなかった。

3. 結果

ここでは、まずクラスター分析の結果を示し被調査者自身の解釈について述べる。

3.1. 被調査者 A

図1は被調査者A(日本人学生)のデンドログラムである。

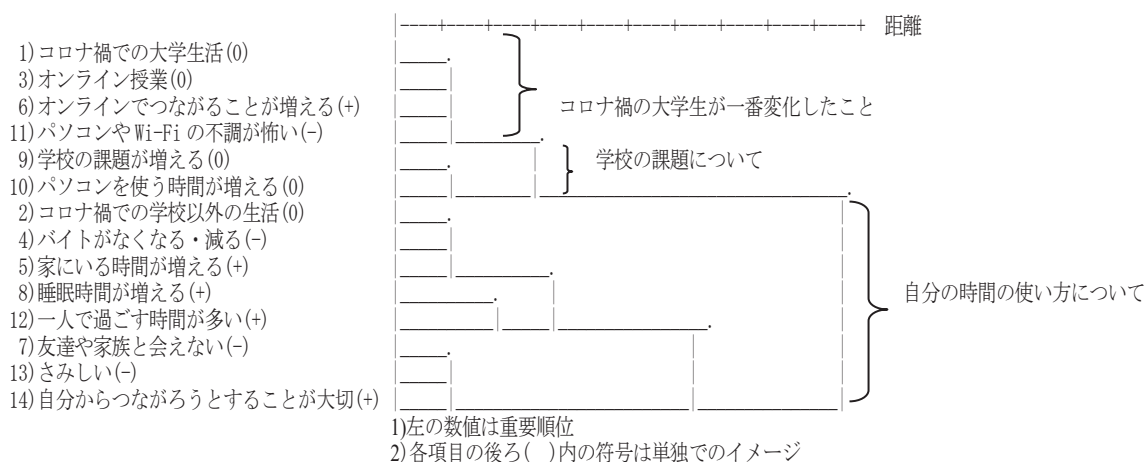


図1 被調査者Aのデンドログラム

被調査者Aのクラスター1～クラスター3までのクラスター解釈のインタビュー内容を以下の表1に示す。また、クラスター名については、クラスター1を「コロナ禍の大学生が一番変化したこと」、クラスター2を「学校の課題について」、クラスター3を「自分の時間の使い方について」とした。

表1 被調査者Aのクラスター解釈

<p>クラスター1：『1)コロナ禍での大学生生活(0)』『3)オンライン授業(0)』『6)オンラインでつながることが増える(+)]『11)パソコンやWi-Fiの不調が怖い(-)』</p> <p>コロナ禍ならではの学生生活に関するこのイメージ。 オンライン授業は、登校やその準備にかかる時間が少なく済む。朝起きてすぐ、そのまま参加できる。 オンラインで韓国の学生対象の日本語教育実習をしたが、<u>対面の実習ならオンラインほど1人1人の表情を見て授業をするのは難しいので、その点オンラインでできて良かった。</u>でも、オンラインの環境がお互いに整っていないと大変だった(音声聞きにくいなど)。オンラインでの実習で、<u>クラス全体を1つのカメラで映して行うより、個々のパソコンからアクセスして個人の学生1人1人の顔が見える環境のがやり易かった。</u> オンライン授業だと、モチベーションが保ちにくい。 留学生と直接会うことができなかったので、留学生たちとオンラインで自己紹介したり、料理を作るイベントをして、コロナ禍ならではのと思った。海外にいる友達とオンラインでつながったりできるのは、いろんな国の人たちが集まれているけれど、やはり直接会って話すほうがいい。 オンラインでは、<u>1人1人にフォーカスして見れるのが良い。</u>対面では大人数で楽しくわいわいできる良さがある。<u>終わった後の親密感</u>は違うかな(対面の方が親密になる)と思った。 海外にいる友達にはコロナ禍になってからのほうがSNSでの連絡が増えたような気がする。 パソコンが壊れた時に、1ヶ月ぐらい携帯から授業を聞いていたが、画面が小さくて不便なのと、課題を携帯のWordで作成するのが不便だった。携帯で授業を聞いていると、勉強してる感があまりしない。<u>コロナ禍に入ってから、パソコンなどの不調に敏感になった気がする。</u></p>
<p>クラスター2：『9)学校の課題が増える(0)』『10)パソコンを使う時間が増える(0)』</p> <p>テストが対面でできなくなったから仕方ないことのイメージ。 今までは、<u>一発のテストに向けて頑張るという感じだったが、今は日々の積み重ね(課題)で良い成績をとるために頑張るという感じ。</u>テスト実施する科目は1つも無くて、後期は全てレポートで評価。毎回レポートが出される科目もある。授業にかかる負担はコロナ禍になる前よりも重い。前期はオンラインでテストもあって、オンラインで配布された問題について時間内に回答して提出するスタイルだった。<u>テスト中、パソコンの調子が悪くなるかも心配で、自分はタイピングも遅いので、そこで差がついてしまうのではと不安だった。</u> コロナ禍になる前は、課題以外にパソコンは使わなかったが、コロナ禍になってパソコンを使っている時間が増えた。WordやMicrosoft teamsやZoomなどに詳しくなったかも。Microsoft teamsとZoomは、コロナ禍になってはじめて使ってみた。<u>大学のポータルやメールで課題提出するよりも、課題提出が楽で、提出されたかどうかの確認もできるので安心感があつた。</u></p>
<p>クラスター3：『2)コロナ禍での学校以外の生活(0)』『4)バイトがなくなる・減る(-)』『5)家にいる時間が増える(+)]『8)睡眠時間が増える(+)]『12)一人で過ごす時間が多い(+)]『7)友達や家族と会えない(-)]『13)さみしい(-)]『14)自分からつながろうとすることが大</p>

<p>『切+』</p> <p>自分の時間の使い方のイメージ。</p> <p>外で遊ぶのが好きだったので、前よりも家に1人での時間が増えた。SNSなどで自分の近況についてアップする時に、人の目が気になる。例えばディズニーランドに行ってきた写真を投稿する場合、「今この状況で行くの？」ってネガティブにとられることを気にしてしまう。自分はSNSにいろいろ載せないようになった。</p> <p>バイトは、緊急事態宣言が出てお店が強制的に夜8時に閉まるので、前は夜12時ぐらいまでに働けてたのが、今は夜9時までなので収入が減ってしまう。バイトは、飲食店と学童保育の先生の2つをしているが、コロナ感染の第1派の時には、学童保育のバイトは、病院勤務の親御さんがいる児童や、学校がお休みの間、仕事で昼間子どもを見ることができない家庭の児童がたくさん預けられて、逆にバイト時間が増えた。今は学校が再開して勤務時間はコロナ禍になる前とあまり変わらない。</p> <p>学童のバイトは、コロナに感染するかもと怖かった。児童はマスクをしても鼻が出たり、食事中しゃべったりするし、身体接触が多いので怖かった。飲食店のバイトはお互い防疫をしているし、そこまでお客さんと接触しないのでそこまで怖くない。</p> <p>お客さんの立場としても夜8時にお店が閉まるのは不便。遊びに行ったりご飯に行ったり、友達を誘うのもしにくくて、外出しなくなった。</p> <p>外出しなくなった分お昼寝をしたり、オンライン授業なのでぎりぎりまで寝たりできるようになった。オンライン授業が始まって少し慣れてきた秋くらいには昼夜逆転してしまったが、今は意識的に逆転しないように気をつけている。</p> <p>趣味や教員採用試験の準備に時間をたくさん使える。</p> <p>寮で過ごしているの、家族ともあまり会えない。さみしい。実家に帰りたい。今年は留学生もいなくてさみしい。</p> <p>会えないにしても、(オンラインで)何か一緒にしようよって声をあげないと思って、自分から声をかけるようになった。</p>
<p>クラスター全体</p> <p>ニュースを見ているとマイナスのイメージだが、この時間をどう使うかによってプラスともマイナスとも言えない。充実している時間もある反面、家にいるとだらけてしまって時間を無駄にしている時もある。</p> <p>今までは、外に出て友達と会って楽しく過ごすことが、自分の中の充実の定義だったが、コロナ禍になって、家に1人でいてもどう過ごすかを考えて、自分の充実の定義が変わったと思う。</p>

クラスター1では、コロナ禍の大学生が一番変化したことについて話している。被調査者Aは海外の大学でオンラインの日本語教育実習を行ったが、オンライン授業をする側になってみて、学生1人1人の表情を見られることがメリットだと話した。留学生とのオンラインイベントでも、オンラインの方が1人1人にフォーカスして見ることができると話し、オンラインは対面よりも個に注目できる良さがあることが分かる。一方で、オンラインでは集団の親密度がそこまで上がらないこと、モチベーションが保ちにくいこと、またパソコンやWi-Fiなどの環境に問題が生じる不安などデメリットも指摘している。

クラスター2では、学校の課題について話している。コロナ禍になってテスト中心の評価からレポートや課題中心の評価に変わり、成績のためにテストの時に集中して頑張るというよりは、日々の積み重ねを大切にするようになったと話す。また、オンラインでテストを実施される場合には、パソコンやWi-Fiの環境、タイピング能力などのせいで不利になるかもと不安に感じていることが分かる。また、課題の提出方法については、大学のポータルやメールを利用するよりも、Microsoft teamsで提出する方が便利で提出が無事にできているかの確認もできて安心感もあったと話す。

クラスター3では、自分の時間の使い方について話している。被調査者Aは、もともと外に出て活動することが好きで多かったため、コロナ禍になって外出は減り、家族や友達に会いにくくなったと話す。人に会えないことで寂しいと感じることがあり、コロナ禍で精神的な負担がかかっていることが窺える。SNSでの投稿も以前より人の目が気になりしなくなったと話す。また、緊急事態宣言によりアルバイトの時間が強制的に短くなったことで収入が減ってしまったとも話す。これら

は、飯田ら(2021)の「新型コロナウイルス発生前後の経済的困り感」の部分とも共通している。しかし、学童保育など、コロナ禍に需要が増えるアルバイトでは逆に勤務時間が増えるということも分かった。

全体として、被調査者Aはコロナ禍の生活は、個人がどう過ごすかによってプラスともマイナスともとれると話している。そして、以前は外で友達と過ごすことに価値を感じていた被調査者Aが、今は家の中でどう過ごすかという部分を考えるようになり、本人の「充実」に対する考え方が変化したことが特徴的である。

3.2. 被調査者B

図2は被調査者B(日本人学生)のデンドログラムである。

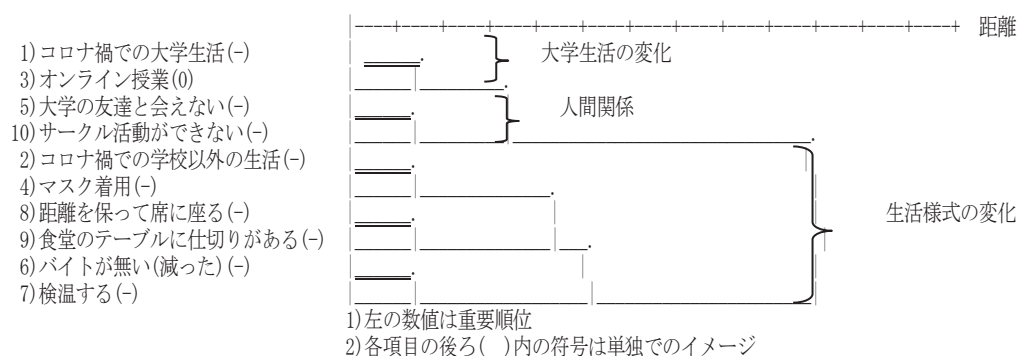


図2 被調査者Bのデンドログラム

被調査者Bのクラスター1～クラスター3までのクラスター解釈のインタビュー内容を以下の表2に示す。また、クラスター名については、クラスター1を「大学生活の変化」、クラスター2を「人間関係」、クラスター3を「生活様式の変化」とした。

表2 被調査者Bのクラスター解釈

<p>クラスター1：『1)コロナ禍での大学生活(-)』『3)オンライン授業(0)』</p> <p>大学の授業がオンラインに変わり、学校に入れなくなったことに関するイメージ。 オンライン授業に慣れていない先生もいて、学生もオンラインに慣れていなかったのも、こんな授業でいいのかなという印象を受けた。<u>もともと機械に慣れている先生とそうでない先生とでオンライン授業の質に差があった。</u>機械に慣れている先生の授業は、今どこを見るべきかななどの指示も的確だったので、学生が何をしたらいいかわからない無駄な時間が無かった。そのため、その先生のオンライン授業は対面の授業との差が無かった。その授業では、<u>事前に授業の資料がアップロードされたり、先生がプレゼンテーションの他にもたくさんファイルを見せてくれて分かりやすかった。</u>逆に、授業の中で動画を見せてくれようとしていた先生たちがたくさんいたが、参加している学生数が多くて回線が重くなり上手く見れなかったり、画像は見えていても音声がかえらないなどトラブルが多かった。</p> <p>前期にオンライン授業を受けた経験があったおかげで、後期のオンラインでの日本語教育実習もいろいろ分かった上でスムーズに行えた。1回目実習では、クラス全体が1つのカメラに映っている状態だったので、学生1人1人が見えずに大変だったが、2回目の実習では<u>学生がそれぞれのパソコンから参加していたので、学生1人1人を見ることができて良かった。</u></p> <p>コロナ禍でオンライン授業を経験して、こんな方法があるのかと思った。教育学部の授業は模擬授業など対面でする方が良い授業が多いが、<u>基本的に聞いていることが多い授業(理論授業)では大講義室などで授業を受けるよりもオンライン授業の方が効率が良いのではと思った。</u></p>
<p>クラスター2：『5)大学の友達と会えない(-)』『10)サークル活動ができない(-)』</p> <p>友達と会う機会が減ったことからくるイメージ。 大学の授業をオンラインで聞きながら、分からない部分を友達にLINEで聞いて、その延長で話してということ</p>

<p>はあった。オンラインでの交流は、コロナ禍になってからのほうが比較的増えた。<u>以前は会ってしていたことがオンラインになった感じで、実際にオンライン飲み会も何度かした。</u></p> <p>オンラインでのコミュニケーションでは、一度に複数の音声は流れないので同時に喋れず、<u>喋り出すタイミングを見計らって喋るのが大変だなと思った。</u></p> <p>吹奏楽のサークルは、コロナ禍により学校から課外活動を全て禁止されてできなくなってしまった。国際交流のサークルは、留学生が今年は来ないため会えず、以前は留学生とお出かけもしていたが全くできなくなった。コロナ禍以前からの留学生の友達とは、それぞれが母国に帰国後の今も Zoom での飲み会などしている。コロナ禍以前には、Instagramなどで連絡すること以上のことはあまり無かったが、<u>コロナ禍になって何かのきっかけでオンラインで集まるうということになりやすくなった。</u>それまでは、<u>オンラインで集まるという概念が無かった。</u></p>
<p>クラスター3：『2)コロナ禍での学校以外の生活(-)』『4)マスク着用(-)』『8)距離を保って席に座る(-)』『9)食堂のテーブルに仕切りがある(-)』『6)バイトが無い(減った)(-)』『7)検温する(-)』</p> <p>コロナ禍の新しい生活様式に関するイメージ。</p> <p>日本はマスク着用の義務化はされていないが、マスクをしていない人が飲食店のバイト先に来ると怖い。飲食店はお客さんがマスクを外して食事するので、<u>一緒に住んでいる祖父母のことが心配で少しバイトをお休みすることもあった。</u>しかし、<u>自分の意志とは関係なくシフトが減らされることもあって、シフトの希望が週4日なら実際は週2~3日のシフトになっていた。</u>勤務時間も極力減らされて、<u>バイト代が減って自由に使えるお金が減るのが不便だった。</u></p> <p>大学の教室は座れる席が限られるようになり、学生食堂ではあらかじめ座れる席が減られ、仕切りが付けられた。飲食店は座れる席を減らしたり仕切りを設置しているところもあった。電車の中でもなるべく間隔を空けて座ろうという感じになった。仕切りを設置して防疫対策をしているお店は県から安心店舗のステッカーをもらえて店に貼ることができる。お客さんとして飲食店を利用する場合は、そのステッカーがあるお店を選ぶことが多いように思う。</p> <p>いろいろな場所で検温をするが、非接触の体温計で測る為、マスクからの熱で本来の体温より高く出てしまうなど温度が正確ではないという面がある。</p> <p>アプリを携帯に入れて、<u>Bluetoothをオンにしておく、感染者と濃厚接触をしたかどうかおしえてくれるアプリがあるが、そのアプリの普及率は高くない。</u>でも、日本の学校での教育実習生はそのアプリを入れておくことが必須だったので、自分を入れていた。</p>
<p>クラスター全体</p> <p>自分でいろいろ気をつけなきゃいけないが増えたのと、他者への不信感が増えた。コロナはインフルエンザのようにワクチンや特効薬があるわけではないので、<u>常に気を張っていかなくてはいけなくなった。</u>マスク着用、手の消毒、手洗いがいをこれまでより入念にするようになった。</p> <p>新しい選択肢が増えた。オンラインなど新しいやり方が増えた。<u>これまで浸透しにくかったオンラインの方法が、コロナ禍によって強制的に浸透した。</u></p> <p>オンラインで不便だったことは、対面に比べて相手の反応が分かりにくいこと。学生のプライベートを守るためと回線を軽くするためにも大学からは学生は授業中、基本的に顔を出さないようにとなっていたし、先生も1度も顔を出さない方もいたので授業の時不安になった。</p> <p>オンラインで良かったことは、遠くにいる友達や中高の時の友達などと気軽にコンタクトが取れる。今までなら直接集まることが前提になっていたが、オンラインの方が日程も合わせやすく集まりやすい。</p>

クラスター1では、大学の授業がオンラインに変わり、学校に入れなくなったことについて話している。オンライン授業は、授業を担当する先生がどの程度機械に慣れているかに応じて授業の質が変わると話し、機械に慣れている先生は事前に授業の資料をアップロードしたり、複数のファイルを提示してくれたのが良かったと話している。また、授業中に動画を見せようとする先生の授業では、動画の再生トラブルが多かったと言う。オンライン日本語教育実習では、学生がそれぞれのパソコンから授業に参加するスタイルで学生1人1人を見ることができて良かったと話し、被調査者Aと共通した。また、理論授業は対面よりむしろ非対面の方が良いのではとも指摘した。

クラスター2では、友達と会う機会が減ったことについて話している。コロナ禍になったことで、以前は会ってしていたことがオンラインに変わり、オンライン飲み会などもたくさん行っていると話した。その経験から、オンラインでのコミュニケーションは同時に話せないため喋り出すタイミングを見計らう必要があり不便だとも指摘した。コロナ禍になったことで、それまで無かった「オンラインで集まる」という概念が生まれ、オンラインで集まりやすくなったとも話している。

クラスター3 では、コロナ禍の新しい生活様式について話している。飲食店でのバイトをしているため、一緒に暮らす祖父母への感染リスクを考えバイトを自ら休むこともあったと言う。しかし、自分の意志とは関係なくシフトを減らされることも多く、自由に使えるお金が減ったことが不便だと話す。これは、被調査者 A や飯田ら (2021) の「新型コロナウイルス発生前後の経済的困り感」の部分に共通している。また、食堂や飲食店では、席に仕切りを設置したり、席をあらかじめ減らすなどの措置が取られており、被調査者 B もそのような防疫対策がしっかりされている店を多く利用したと話す。また、コロナ感染者と濃厚接触をしたか知らせるアプリがあるが、実際のところ普及率は高くないと指摘した。

全体として、COVID-19 への感染予防のために常に気を張って過ごすようになったと話している。このようにストレスを感じて生活しながらも、コロナ禍の状況になったからこそ「オンラインで会う」という方法が強制的に世間に浸透し、人とのつながり方の選択肢が増えたとポジティブに捉えている部分もあるところが特徴的である。

3.3. 被調査者 C

図3は被調査者 C (韓国人学生) のデンドログラムである。

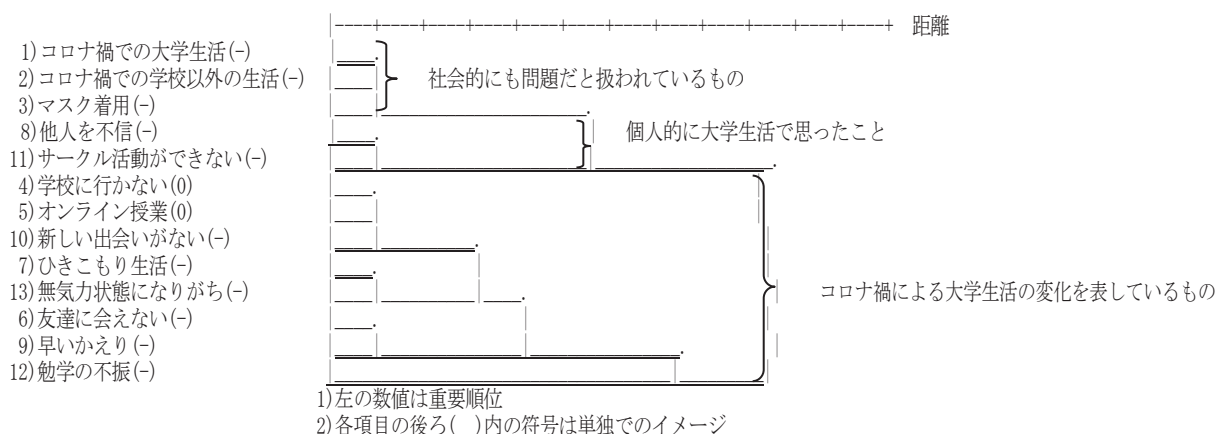


図3 被調査者 C のデンドログラム

被調査者 C のクラスター1～クラスター3 までのクラスター解釈のインタビュー内容を以下の表1に示す。また、クラスター名については、クラスター1を「社会的にも問題だと扱われているもの」、クラスター2を「個人的に大学生活で思ったもの」、クラスター3を「コロナ禍による大学生活の変化を表しているもの」とした。

表3 被調査者Cのクラスター解釈

<p>クラスター1：『1)コロナ禍での大学生活(-)』『2)コロナ禍での学校以外の生活(-)』『3)マスク着用(-)』</p> <p>社会的にも問題だと扱われているもののイメージ。 熱の検査(健康状態の自己診断)のために携帯を常に持たなくてはいけないことが不便。(校舎に入る際の健康状態のアプリのチェックで)授業に遅刻することもあった。オンライン授業で勉強がはかどらない。オンデマンド授業は不便なことは無かったけれど、集中力が落ちる感じがしたが、オンデマンド授業では課題が必須なので、それで一生懸命聞こうとできた。ライブ授業でも意外と、質問してはいけない空気があって質問しづらかった。対面の時は、みんなマスクはしていてもたくさんの人が集まるので感染が怖かった。教室の中のソーシャルディスタンスは十分だったと思う。学校の食堂は人があまりいないこともあって(コロナ感染を)気にせず食事していた。当然なことができなくなって不便になった。 外出時のマスク着用が大変。人との距離感を考えながらせいかつしなきゃいけなくなったのが不便だった。コロナ禍で外出の頻度、友達と食事に行くこともだいぶ減った。海外にいる友達とのSNSでの連絡頻度はコロナ禍以前とあまり変わらない。 以前はマスクを着けてはいなかったが、コロナ禍になってマスクを着けるようになった。(韓国)マスク着用義務化で、マスクを着けていないと不審者に思われるので気にする。義務化される前からあまりマスクを着けていない人は見なかった。</p>
<p>クラスター2：『8)他人を不信(-)』『11)サークル活動ができない(-)』</p> <p>個人的に大学生活で思ったもののイメージ。 この人もコロナの感染者かもしれないと思ってしまう。バスでの通学をしているが、みんなマスクを着けていてもバスの中ではくっついているので怖い。コロナ禍になる前は、周りでくしゃみなどしている人がいても「風邪なんだな」と思うくらいだったのだが、コロナ禍になってからはくしゃみしている人を見ると怖いと思うようになった。 新しく加入しようと思っていたサークルがあったが、コロナ禍でサークル活動自体が無くなりできなくなってしまった。</p>
<p>クラスター3：『4)学校に行かない(0)』『5)オンライン授業(0)』『10)新しい出会いがない(-)』『7)ひきこもり生活(-)』『13)無気力状態になりがち(-)』『6)友達に会えない(-)』『9)早いかえり(-)』『6)勉学の不振(-)』</p> <p>コロナ禍による大学生活の変化を表すイメージ。 オンライン授業をすると決まった時、はじめはやり方が分からなくて友達に聞きながら進めた。最初は学校に行かなくて済むなら楽かなと思ったが、コロナ禍の状況が続いて学校にも行きたいと思うようになった。 1年生を終えてすぐ交換留学に行き、留学から帰ってきたらコロナ禍で学校に行かないので、後輩が1人もいなくて…寂しい感じがする。1年生の時にサークルや研修で先輩にたくさん助けられたことがあったので、今度は自分が後輩を助けてあげたいと思っていたがコロナ禍でそれができないのも寂しい。 大学に行かなくなって、家にいる時間が増えて自然とひきこもり生活になってしまった。 家で何もしないまま時間を潰して、「(自分は)何をしてるんだろう?」と思って無気力状態になる。コロナ禍で、睡眠時間をしっかりとれるようになったという面はあったが、起きる時間が決まっていないので昼夜逆転したこともあって大変だった。 大学に行ったとしても、自分がやるべきことを終えたらすぐに家に向かうので、帰りが早くなった。以前は授業が終わった後に友達と遊びに行ったりご飯に行ったりしていたのに、今はそれが無い。 オンラインでずっと勉強していて、学習方法が違って慣れない。誰も「勉強しなさい」と言わないから、勉強を面倒に思っなくなり。以前は先生が集中できていなくなったり寝てしまったりすると注意してくれて、集中できた。また、友達と図書館に行って嫌でも勉強する環境があった。ライブ授業でも学生はカメラオフなので先生から学生の様子は見えず注意されることはない。コロナ禍で成績自体は下がっていないけれど、勉学の不振を自分が感じる。</p>
<p>クラスター全体</p> <p>コロナは自分にとって災いである。コロナ禍の大学生活にプラスのイメージは無い。 特に、外出の度にマスクを着けなくてはいけないこと、人と会えないことが不便。当然だと思っていたことが、当然ではなくなったことが不便。例えば、夜遅くまでお酒を飲めないことなど。 コロナ禍での徴兵については、入隊する時にPCR検査をしっかりとっているので特に心配はしていない。軍隊の過酷な勤務中もマスク着用義務があるので、少しやるのが楽になっていると聞いた。</p>

クラスター1では、社会的にも問題だと扱われているものについて話している。校舎に入るときに、健康の自己診断アプリのチェックがあるため、携帯を持ち歩かなくてはならず、そのチェックに時間がかかり授業に遅刻してしまうこともあったのが大変だったと話す。オンライン授業に関しては、オンデマンド授業は課題が義務化されていたことが授業をしっかり聞く動機になったと言う。

また、ライブ授業は教師とコミュニケーションがとりやすいかと思いきや、質問など授業の流れを止めてはいけない雰囲気があり質問はしづらいと指摘した。また、日々のマスク着用が大変だとも話している。コロナ禍によって、外出や友達との食事の機会が減っていることも窺える。

クラスター2では、個人的に大学で思ったものについて話している。周りの人がコロナ感染者ではないかという不信感や、バスのような人が密集する空間で恐怖も感じていることが分かり、コロナ禍によって精神的な負担を感じていることが窺える。

クラスター3では、コロナ禍による大学生活の変化について話している。留学先から帰ってきて、大学での後輩との関わりにも期待していた被調査者Cは、コロナ禍により大学に行くことができなくなり、後輩との関わりを奪われたことを非常に残念に感じている。大学に行けるようになったとしても、以前のように授業が終わってから友達と食事したりすることは無くなったと話す。このことから、被調査者Cは、コロナ禍により以前に比べて他者過ごす時間が減っているということが分かる。また、家で過ごす時間が増え、何もしない時間が生まれることで無気力状態にもなると話している。また、大学に行かなくなったことから睡眠時間は十分に取れるようになったが、昼夜逆転してしまって大変だったとも話した。このコロナ禍による昼夜逆転は、被調査者Aの経験と高柳・安(2021)の内容にも共通している。勉学に関しては、成績の低下は見られないが本人の感じる達成感や修学度が低下していることが窺える。

全体として、被調査者Cはコロナ禍によって「当然なことができなくなってしまった」と強調し、コロナは災いだと表した。このことから、被調査者C コロナ禍の学校生活を強くマイナスに捉えているということが窺える。

3.4. 被調査者D

図4は被調査者D(韓国人学生)のデンドログラムである。

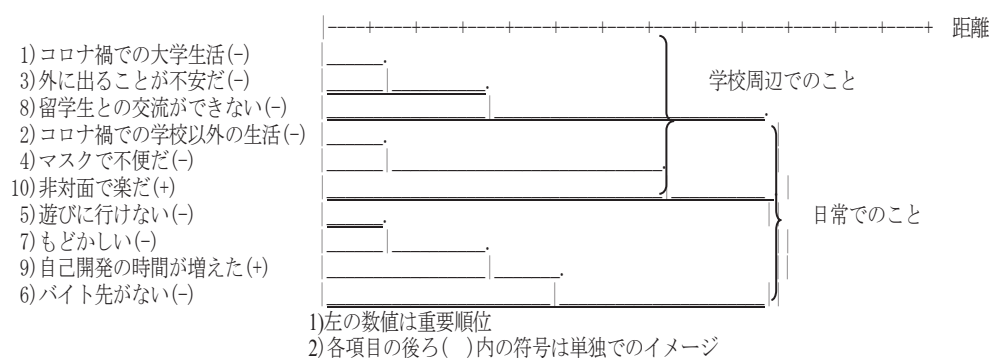


図4 被調査者Dのデンドログラム

被調査者Dのクラスター1～クラスター2までのクラスター解釈のインタビュー内容を以下の表1に示す。また、クラスター名については、クラスター1を「学校周辺でのこと」、クラスター2を「日常でのこと」とした。

表4 被調査者Dのクラスター解釈

<p>クラスター1：『1)コロナ禍での大学生活(-)』『3)外に出ることが不安だ(-)』『10)非対面で楽だ(+)]『8)留学生との交流ができない(-)』</p>
<p>学校周辺で感じるマイナスのイメージ。 <u>大学で授業が終わった後、友達と遊ばず、すぐに家に帰るようになった。</u>1年を通して、ほとんど非対面授業だけだった。以前は大学の授業後に友達とよく遊ぶ方だったが、コロナ禍になって今は一切そういうことが無い。 コロナ禍になって外に出ることが怖くなった。感染者が一時的に減った時は少し不安が和らいだけれど、それも感染者がすぐに増えて終わってしまった。新型コロナが発生してすぐは、ここまで長引くとは思っていなかった。 授業がはじまる時は、当時感染者が多かった大邱地域からも学生たちが大学に来るので怖いと思った。そのため、<u>大学でオンライン授業が決定してほっとした。</u>途中1ヶ月くらいは対面授業のため大学に行っていたが、バスでの通学が不安だった。行きは大学のバスがあるからいいけれど、帰りは市営バスで帰らなくてはいけないため、いろんな人と乗り合わせるのが不安だった。当時、<u>国からの安全メッセージ(感染者の動線を知らせるもの)</u>で、<u>バスターミナルでの感染がよく報告されていたため怖かった。</u>勉強をする立場としては、非対面授業では集中しにくかったが、<u>安全を考えたら非対面がいいと思った。</u>ライブ授業でも全然集中できなかった。<u>オンデマンドの授業は先生にチャットなどで質問できるが、これもチャットが苦手な自分は質問しづらかった。</u>ライブ授業でも先生の話に割って入らないと質問できないため、これも質問しづらかった。対面授業なら、先生の話の途中で手を挙げたら質問できるけれど、オンライン授業では学生のカメラはオフなので先生も見えない。 <u>コロナ禍になる前は、留学生との交流が多くて、一緒に飲みに行ったり遊びに行ったりしたが、今は全く無くなってしまい、コロナ禍前とのギャップが激しくて今残念に思う。</u></p>
<p>クラスター2：『2)コロナ禍での学校以外の生活(-)』『4)マスクで不便だ(-)』『5)遊びに行けない(-)』『7)もどかしい(-)』『9)自己開発の時間が増えた(+)]『6)バイト先がない(-)』</p>
<p>家の近くで感じるマイナスのイメージ。 以前はマスクを着ける習慣が無かったが、<u>コロナ禍になってマスクを着けるようになり、自分は眼鏡をかけているので眼鏡が曇ってとても不便だった。</u>眼鏡をかけない方がむしろよく見えるくらいだった。 <u>旅行もカラオケも行きたいけれど、不安で遊びにも行けない。</u> <u>マスク着用や外に遊びにいけないことがもどかしい。</u> <u>今しているバイトの時間も減らされるし、合掛け持ちのバイトも探しているが、全然見つからない。</u> <u>家では、料理や個人的な勉強とか、普段やりたくてもできなかった勉強をしている。</u>将来ITのプログラミングの仕事をしたいと考えていて、その勉強をしている。</p>
<p>クラスター全体</p>
<p>コロナ禍になって「人と会えない」というのを強く感じる。以前は友達によく会いに行ってお酒を飲んだりしていたが、今はコロナ感染が不安で行けなくなってしまったし、遊びに行っても、<u>ネットカフェやカラオケなどは怖くて行けないので大変。</u>最近夜9時以降に飲食店で食事をする事ができないので、尚更友達に会う機会が無い。 <u>日本の友達とのSNSでの連絡頻度は、コロナ禍になって増えた。</u>以前は、お互い近くにいる友達と会うのに忙しくてあまり連絡は取らなかったが、今はお互い「生きてるか？」と連絡を取り合う。 <u>最近思うことは、コロナ禍のせいで人が不安になっているからか以前より怒りっぽくなっている気がする。</u>バイトをしている時、以前はお客さんが怒らなかつたような小さなミスでも、最近カッとなって怒ってくるお客さんが増えた感じがする。</p>

クラスター1では、学校周辺でのことについて話している。コロナ禍により大学の授業が終わった後に友達と遊ばず、すぐに家に帰るようになったことと、通学時のバスの利用に不安を感じている部分は被調査者Cと共通している。被調査者Dは、通学時やコロナ感染者の多い地域からの学生と対面授業を受けることに不安を感じており、大学の授業が非対面に決まった時はほっとしたと話している。このように、安全面を考えると非対面の授業が良いが、勉強という面で考えた場合にはオンライン授業は全く集中できないと不便さを表した。オンライン授業中の質問のしやすさについては、被調査者Cと同じくライブ授業でも先生の話に割って入らないと質問できないので、質問しにくいと指摘した。また、コロナ禍により大学での留学生との交流が一切なくなってしまったことも残念に思っている。

クラスター2では、日常でのことについて話している。被調査者Dは眼鏡を普段着用していることもあり、コロナ禍でマスク着用をする際、眼鏡が曇ってとても不便だと話した。また、カラオケなどに行って遊びたいが不安で行けず、もどかしさを感じていることも窺える。バイトに関しては、新しく始めようとしているバイトの求人が全く見つからず困っていると話す。このように、マイナ

スなイメージが多い中で、被調査者Dは家で過ごす時間をつかって、就職のため勉強をしており、家での時間を有効的に使おうとする姿勢が見られる。

全体として、被調査者Dはコロナ禍で「人に会えない」ということを特に強く感じていることが窺える。このように、コロナ禍で韓国の友達と人と会えない分、日本の友達とのSNSでの連絡頻度は増えたと話している。これは被調査者Bの話とも似ている。また、バイト先での経験から人々がコロナによるストレスで怒りっぽくなっているということも指摘した。

4. 考察

ここでは、調査結果より日韓の各イメージの特徴を整理し比較することで、日本と韓国の被調査者の持つイメージの共通点と相違点について述べる。

4.1. 日本人被調査者(A, B)2名の特徴

2名の被調査者の共通のイメージは、「オンライン授業」「友達と会えない」「バイトが無くなる・減る」の3つで、2名とも「オンライン授業」に関しては、プラスともマイナスとも言えないと捉えており、「友達と会えない」「バイトが無くなる・減る」についてはマイナスと捉えている。

「オンライン授業」に関して、今回2名の被調査者は、バックグラウンドとしてオンライン日本語教育実習を経験したという部分が共通しているが、特徴的な点として、2名とも学習者の立場と実習生の立場からオンライン授業のプラスの部分とマイナスの部分をどちらも感じたため、プラスともマイナスとも言えないと捉えている点が挙げられる。「オンライン授業」に負担感(マイナスの部分)を感じるかどうかは、飯田ら(2021)でも指摘されたようにWi-Fiなどのオンライン環境が整っているかや、デジタル機器操作の知識が十分であるかによって左右される。学習者の立場で実際に被調査者Aはコンピューターの不具合で苦勞をし、被調査者Bはデジタル機器操作に慣れていない教師の授業で不便を感じたが、慣れていない教師の授業は分かり易かったと話した。また実習生の立場では、教室と教室をそれぞれ一台ずつのパソコンで繋ぐスタイルの授業で学生1人1人の表情も見えず、声も聞こえにくいなど不便があったが、学生が各自のパソコンからアクセスするスタイルの授業では対面授業よりも学生1人1人表情が見えて良かったと話した。このことから、オンライン授業で互いに意思疎通を図る場合には状況に合わせた繋ぎ方をするかどうかでもオンラインでの教育実習の評価が変わってくるのが分かった。

「友達と会えない」ことに関して、飯田ら(2021)ではコロナ禍での影響による孤立感はずしも認められないと示されたが、今回の2名の被調査者はコロナ禍の前から学部生の友人だけでなく留学生との交流も積極的に行ってきた背景があるため、コロナ禍により留学生が減り交流の形が大きく変わってしまったことに喪失感を感じている様子が窺えた。

「バイトが無くなる・減る」ことに関して、飯田ら(2021)でも保護者の収入減少や学生のアルバイト収入減少などで経済的に困っているという認知が高くなっていると指摘したように、今回の2名の被調査者も自分自身のバイトのシフトが減らされて直接的に収入の減少を感じていることが分かった。

4.2. 韓国人被調査者(C, D)2名の特徴

2名の被調査者の共通のイメージは、「マスク着用(不便)」「オンライン授業(非対面)」「後輩・留学生との出会いや交流が無い」の3つで、2名とも「マスク着用(不便)」「後輩・留学生との出会いや交流が無い」についてはマイナスに捉えている。

「マスク着用(不便)」に関して、被調査者2名はコロナ禍以前にはマスクをつける機会がほとんど無かったことから、マスク着用がライフスタイルの大きな変化として認識され不便に感じていると窺える。この「マスク着用」は강진호ら(2020)でも大学生のライフスタイルの変化としても挙げられており、韓国人大学生がコロナ禍の傍観者ではなく自らを守るため積極的な行動者になるという行動的变化が窺える。

「オンライン授業(非対面)」に関して、被調査者Cはプラスともマイナスとも言えないと捉えており、被調査者Dはプラスに捉えているという違いがあるが、2名とも「ライブ授業だからと言って質問しやすい雰囲気は無く、先生の話に割って入らなくてはいけないため質問しにくい」「集中力が落ちる」と話した。「オンライン授業(非対面)」をプラスにとらえている被調査者Dも、安全面ではプラスだが、勉強面ではマイナスに思うと話し、対面授業に比べてオンライン授業には不便さを感じていることが分かる。강진호ら(2020)でも、オンライン授業では集中力が落ちるという意見が出されており、やはりオンライン授業は学習者の集中力維持に支障をきたしていると窺える。

また、イメージ項目には上がっていなかったが、インタビューの中で「授業後に友達と食事や遊びに行かなくなり、帰宅が早くなった」「通学のバス(特に市営バス)の利用が怖かった」という内容が2名に共通して見受けられ、これらは강진호ら(2020)で指摘されたコロナ禍によるマイナスの環境的变化とも共通している。

「後輩・留学生との出会いや交流が無い」に関して、コロナ禍で大学行事やサークル活動、留学生の往来ができなくなったことが原因であると窺える。강진호ら(2020)でも、期待していた大学生活どころか大学にも行けない状況で悔しいという意見が挙げられていた。このようにコロナ禍によって授業以外の部分でも大学生活にマイナスのイメージが生まれてしまっていることが分かる。

4.3. 日本人被調査者2名と韓国人被調査者2名の共通点と相違点

被調査者4名とも、友達や後輩、留学生など「人に会えないこと」に対してマイナスのイメージを持っていることが共通した。これは강진호ら(2020)の示唆する外出規制による孤独感の影響に加え、海外への関心が高い学生たちにとっては留学生の往来規制も影響していると窺える。高柳・安(2021)でも、自国に身を置いた状態での外国人との交流はコロナ禍で極端に減り不安を感じるということが示されている。

オンライン授業に関しては、日本人被調査者と韓国人被調査者で捉え方に違いが見受けられた。日本人被調査者は、学習者の立場では「先生によっては資料提供などオンライン授業のほうの方が分かりやすい」実習生の立場では「学生1人1人表情が見えて良い」とプラスな意見も述べられているのに対し、韓国人被調査者は、「集中できない」「質問しづらい」とマイナスな意見を中心に述べているという違いがあった。これらは飯田ら(2021)も指摘したように、学生と教師のオンライン環境が整っているかや、デジタル機器操作の知識が十分であるかによって左右されると言える。今回、日本人被調査者も韓国人被調査者もオンライン授業の際には基本的にカメラも音声もオフで質問や自

分が当てられた際に音声をオンにするというスタイルで、オンライン授業の形式には大きな違いが無かった。そのため、プラスの意見が出た日本人被調査者は授業担当教員のデジタル機器操作の熟練度が高かったこと、実習生として教える側の立場でオンライン授業のプラスの面を感じられたことが 韓国人被調査者との違いだと窺える。

また、被調査者 A と被調査者 C は「課題のために頑張る」という面が共通していた。今回、被調査者 A と C は課題の存在がオンライン授業のモチベーションとしてポジティブに働いていて日韓共通してオンライン授業での課題の存在価値が認められるが、강진호ら(2020)では課題が多くて疲れるという意見が出され、飯田ら(2021)では課題管理など個別学習に慣れていないと負担感が増すという結果も示唆されているため、オンライン授業で教師が学生たちに課す課題量や期限設定については配慮が必要であると言える。

全体を通して見た場合には、被調査者 A と D で「家にいる時間」をプラスに捉えて時間を有効利用しようとして心がけていることが共通している。また、被調査者 A と C では「昼夜逆転」、被調査者 B と D では「SNS での連絡頻度の増加」が共通して話され、これらは日韓の教育環境の違いに関係なく現れる現象だということが分かる。「昼夜逆転」に関しては、高柳・安(2021)の日本人韓国留学生のインタビューでも挙げられており、その原因として、登校して決まった時間に授業を受けることが減り、オンデマンド授業で深夜に授業を視聴したり課題に取り組めるという環境になったことが述べられている。

5. まとめと今後の課題

今回の調査では、コロナ禍での大学生活について「人に会えないこと」に関する内容が被調査者 4 名に共通して挙げられ、マイナスのイメージで捉えられていた。オンライン授業に関しては、日本人被調査者は「たくさんの資料提供」「学生 1 人 1 人の顔が見える」などのプラスの内容についても話す中、韓国人被調査者は「集中できない」「質問しづらい」というマイナスの内容を中心に話した。しかし、日韓それぞれの被調査者 1 名ずつが「課題」の存在の大切さに触れ、オンライン授業を運営するうえで「課題」を出すことは学生たちのモチベーション向上に効果があることが明らかになった。また、オンライン授業によって学校に決まった時間に行かなくなり、「昼夜逆転」という生活習慣の乱れを引き起こしていることも見受けられた。コロナ禍で大変なことが多い中で、人との連絡の頻度が増えたり、オンラインでつながるという方法が強制的に日常化され、離れたところにいる友達と繋がるきっかけが以前より増えているということも分かった。

今後は、日韓の大学生活における COVID-19 の影響だけでなく、日本人学生を対象に韓国で実施された韓国語オンライン研修のように、海外で行われるオンライン授業についても調査し、両者を比較検討することにより、COVID-19 が学習面に与える影響について多角的に検討していきたい。

謝辞

本研究の一部は日本学術振興会学術研究助成基金助成金基盤研究 (C) (課題番号 17K02838, 研究代表者: 安龍洙) の助成を受けて行われた。

引用文献

- 飯田昭人・水野君平・入江智也・西村貴之・川崎直樹・斉藤美香. (2021) 「新型コロナウイルス感染拡大が大学生に及ぼす影響（第1報）～北海道内の大学への調査結果から～」北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要, **12**, 147-158.
- 강진호・박아름・한승태. (2020) 「코로나-19로 인한 대학생들의 라이프스타일 변화 경험에 대한 현상학적 연구」 한국엔터테인먼트산업학회논문지, **14(5)**, 289-297.
- 高柳有希・安龍洙. (2021) 「COVID-19가韓国留学中の日本人学生の留学生活に及ぼす影響の一考察」 茨城大学全学教育機構論集グローバル教育研究, **4**, 107-118.